

バスツアー参加者からの感想

今回 2 回目のバスツアーを経験することが出来ました。長沼さんからお話では、関東地区では津波は来ないと言われていた為、震災の日は逃げず、800 人もの人が犠牲になったと言うことを聞きました。

震災後地面を高くして新しい町づくりをしても、かつての懐かしさがなくなり寂しい思いをするので 12 年経っても震災は終わっていないというような感覚がすると知り、「災害は町だけではなく人々の幸福感も打ち壊してしまうものなのだ」と改めて痛感することが出来ました。ここで学んだことは防災の 1 つとして自分の町は大丈夫だと信じ込むのではなく、過去にどんな災害が起きたのかを知ること、いつもと違う気象状況だったらすぐに逃げるのが大切なんだと思いました。また、津波は日和山まで登り小さい波が徐々に大きくなり 8.4m まで及んだということと、来る波より引き波の方が強いということを知り津波に対する恐怖感だけではなく知識を身につけることが出来ました。このような過去の逆境を武器にこれからの未来を良くすることを考えていく必要が私たちにはあるのだと思いました。

今回のバスツアーも様々な話を聞くことができ有意義な時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました！（心理：1 年）

今回の TASKI での活動を経て、中学生とともにバスツアーを行ったことでコミュニケーションの取り方の重要性を学べた。かわまちテラスでの中学生との会話では、話しかけやすいように中学生の立場を心掛けながら会話をしたり、ワークショップでは名前を読んで会話をしやすい環境になるように心掛けたりした。また、長沼さんでのお話では以前のお話ではあまり聞けなかった仮設住宅での出来事を知ることができた。特に印象に残っている話では、6 畳の仮設住宅で 6 年間過ごしたという話が印象的だった。自身はまだ仮設住宅に住んでいた地域の人々のことを考えられていなかったと実感したからである。このことから、今回のバスツアーでの体験を活かして、今後の TASKI での活動でもコミュニティー能力を磨いていきたい。（人文社会：1 年）

今回は初めて中学生との企画でしたが、中学生が元気に真面目に取り組んでくれたおかげで、大きな失敗もなく無事やり遂げることが出来たと思います。また、みんな自分の役割りや中学生と話すことを率先して行っていたので、中学生が話しやすい雰囲気が作れていたのではないかと思います。

尚志祭もあった中、ここまでやり遂げたのは、大きい成果なのではないかと思います。これからの活動に活かしていけるようにしていきたいです。私自身は、バスでの企画や細かいスケジュールの変更に臨機応変に対応できたので良かったと思います。（人文社会：4 年）

私は今回初めて閑上に行ったのですが、県外の内陸の出身であることもあり、津波については明確なイメージが持っていませんでした。なので、実際に現地に行ってみて、震災前の閑上の写真と現在の閑上を比べて見たり、津波の高さはどのくらいであったかを知ること、津波の怖さや凄まじさをより理解することができたと思います。

長沼さんのお話の中で、過去に津波が起きていたにもかかわらず、伝承が正しく行われていなかったために被害が大きくなってしまったということを知り、正しく伝えることの大切さや、自分のいる場所は必ず安全であるという認識を持たずに、常に「もしも」を想定して生活することの大切さを学びました。また、自分のいる地域でも過去にあった災害の痕跡や起こりうる災害について調べて、災害についての意識を高めたいとも思いました。今回のバスツアーでは中学生のみなさんと一緒に行いましたが、ワークショップを行った際には、中学生の目線から見た斬新な考え方や気付かされるようなものが多く、とても勉強になりました。異なる世代の人達と一緒に何かをするという機会はありませんでした。今回の河北新報社さんとの合同企画ではとても貴重な経験をさせていただくことができました。ありがとうございました。(心理：3年)

自分は大丈夫、自分の住んでる地区は安全などと思い込んでしまうと災害時大きな被害を受けてしまう可能性がある、津波が来るかも、大きな被害が出るかもなどの「予測」を常に意識しておくことが、防災意識を高めることに繋がると学びました。また長沼さんが中学生に問いかけてた、復興とは何かを自分でも考えてみましたが、結局答えが出ませんでした。具体的に何をすれば復興なのかは分からないという事実を知ることが出来ました。

「復興しましたか？」と問われ「復興しました」と断言するのは難しい事なのかもしれません。これからは地域の復興だけでなく、人々の心の復興がキーポイントになってくるのではないかと思います。そして、震災を経験していない(または覚えていない)若い世代の防災意識をどうすれば高くすることが出来るかが課題だと感じました。震災の恐ろしさを知らないと、防災に対する関心は正直低いままだと思います。震災を伝える時は当時の記憶を思い出さなければなりません。辛く悲しい事ですが、当時のありのままを伝え、そして震災から得た教訓を伝える伝承活動こそが、私達の義務だと感じました。また、中学生との閑上ツアーということで、最初の方はコミュニケーションがとれなかったり、うまく会話を広げることが出来なかったりと苦労しましたが、ワークショップでは、中学生が発言しやすい雰囲気を積極的に作り、グループの皆で意見や考えを共有出来たので良かったと思います。

今回学んだことを家族、友人、知人に共有し、防災・減災に皆で努めていきたいと思いません。(心理：3年)

今回初めての経験が多く、中学生とコミュニケーションを取れるか等、不安も多くありました。 ですがとても元気で答えてくれて、真面目に取り組み、積極的に質問をし、取り組む姿や学ぶ姿勢を見て、自分も見習わなければと思いました。今回の活動で多くの経験を得て自分自身の成長にもなり、また足りない所も見えてより励みたいと思いました。

中学生とのコミュニケーションをもっと積極的に出来る様に、話しやすい雰囲気にした
り出来るように今後の活動に活かしたいと思いました。

復興とは何か、震災を経験していないこれからの世代にどう伝えていくべきなのか改めて考えました。

防災の大切さや先人が残した物を忘れず伝え覚えて自分達は大丈夫という意識は捨てる事などやる事も課題も問題もまだ多くあるなど感じました。だからこそ今自分に出来ることを少しでも取り組みたいです。学んだことを多くの人に広め、伝えていき防災などに皆が取り組んでいける様にしたいと思います。(心理：3年)

中学生と関わる機会が少なく、不安な気持ちで始まった河北新報社合同企画でしたが、中学生が真剣に震災のことを学ぶ姿を見て、知らないことを知らないままにするのではなく、知ろうとすることの大切さを学びました。

ワークショップでも、中学生ならではの柔軟な考え方に触れ、改めて、自分なりの防災ポ
トルを考えてみたいと思いました。貴重で有意義な時間を過ごすことができました。

(子ども：3年)